達人の作法 ON

祖父の口癖「よそとちゃうことせなあかん」

盛りつけカップ あくなき素材開拓

木村（きむら） 裕一（ゆういち）さん（61）

◆略歴　1975年関西学院大社会学部卒、東洋アルミニウム入社。80年に木村アルミ箔（大阪市）に入り、87年から社長を務める。「小さくてもユニークな会社でありたい」と、食品の製造販売など新規事業も積極的に展開してきた。
◆好きな言葉　創意工夫

フィルムや海苔など、新しい材料を使ったカップを作り続ける木村さん（大阪市生野区のショールームで）＝原田拓未撮影

労作 弁当箱で花開く

おかずを弁当に入れて仕切ったり、皿に盛りつけたりする時に使う、小さなカップを作る。アルミ箔、紙、フィルムと、次々に新しい素材のカップ開発に挑んできた。

大手アルミメーカーで5年修業し、祖父が興した会社へ。アルミ箔を切り分ける卸問屋だった。「裁断だけでは将来がない」と悩んでいた頃、倉庫で洋菓子のマドレーヌのアルミ製カップなどを作る機械を見つける。「うちのアルミ箔でいろんなカップが作れる」と考えた。

7人いた社員はモノ作りの経験がない。慣れない手つきで金型を削り、機械を調整した。そして、自分たちの手でアルミカップを作り上げた。

転機は時代とともに訪れた。1980年代後半、急速にコンビニエンスストアが増えた。コンビニ弁当は店頭で電子レンジで温めることが多く、アルミカップでは火花が散る。紙にすると総菜の汁がにじんでカップが開き、不評だった。

「フィルムやったら水は通さへんやろ」。プラスチック製のフィルムシートを思い浮かべた。しかし、カップ型にするには熱が要る。薄いと溶け、低温なら形にならない。熱のかけ方のコツをつかんだ。

89年に弁当屋に卸販売するが、売れ行きはさっぱり。アルミや紙に比べて値段が10倍したからだ。だが、値下げしなかった。「やがて必要とされる」と改良を重ねた。

96年、大手コンビニの企画弁当で白色のフィルムカップが採用される。大阪の有名料理人のプロデュースで880円と高級感が売りだった。

使いやすさと見た目が弁当業者に受けた。量産で価格も下がり、コンビニ弁当向けに一気に広まる。フィルムに色や柄を付けると、弁当がカラフルになると喜ばれ、3～4年は独占状態だった。今も国内の市場占有率は6割だ。

だが、すべてのアイデアが実を結んだわけではない。

土中の菌で分解されるフィルムの開発に乗り出した時は、カップに残る臭いを消そうと試みた。トウモロコシ粉を原料にしたところ、値段がフィルムの10倍になり、売れなかった。

アルミ箔をチョコレート用の銀紙などに仕立てるなど工夫を重ねた祖父は「よそとちゃうことせなあかん」が口癖だった。背中を押されて、挑戦を続けてきた。ある日、「いっそ、食べてしもたら」。海苔メーカーが持ち込んだ海苔に目を留めた。

しかし、海苔のカップは形が崩れやすく、ひだがすぐ割れる。切れ込みの角度、熱をかける時間や温度を細かく変えた。海苔が破れない条件を見つけたのは3か月後。食品安全対策などを進め、09年に24枚420円でネットなどで売り出した。今年から百貨店やスーパーに売り込む。

大阪弁で、何にでも首を突っ込む人を指す、「いっちょかみ」。その精神が好きだ。大阪の製造業や流通、サービス業など約80団体で新商品を開発する「なにわ名物開発研究会」の幹事で、生まれ育った大阪のために情熱を注ぐ。

4月中旬に売り出す、茶漬けの素「なにわのお茶漬け」は海苔カップを作る時に出る海苔の切れ端を使う。地元の道頓堀周辺の商店街に声をかけ、塩昆布やあられ、たくあんなど地元食材を集めた。2段重ねの重箱入りは2500円するが「外国人観光客に受けるはずだ」と声を弾ませる。

会社には「銀紙屋」と書いたのれんがかかる。様々な挑戦を続けつつ、祖父から続く1本道を歩く。「よそとちゃうこと」が道を伸ばしていく。

（実森　出）

最新の安全管理技術

食の安心・安全に対する消費者の関心が高まっている。食材だけでなく、容器や包装材料メーカーも管理強化など対応を進めている。

そんな中、食品の安全管理に関する国際規格「ＩＳＯ22000」に注目する企業が多い。国際標準化機構（ＩＳＯ、本部・スイス）のまとめでは、日本でのＩＳＯ22000の認証件数は2007年の149件から、11年には512件に増えた。食品加工メーカーを中心に、容器や包装材料メーカー、輸送業と幅広い。

企業にとって審査費用などの負担は大きいが、信頼性が増すとの見方がある。中国製など安価な製品との競争でも有利だとして中小企業も取得に動いている。

木村アルミ箔も07年に取得した。コンビニ弁当向けのフィルムカップを作る「りんくうタウン工場」はそのノウハウを注ぎ、最新の安全管理技術を生かしている。さらに、それらの経験が「ロールケーキや海苔カップの製造など新しい事業の展開にもつながっている」という。

私の休日 OFF

ミニクーパーSのオープンカーを運転する井上さん（大阪市内で）

BMWの「ミニクーパーS」の屋根を開けてオープンカー状態で走らせています。肌で風を感じ、スピード感を味わうのは爽快です。

三井住友銀行常務　**井上 篤彦さん 55**

風感じて運転楽しむ

冬でも全開にしてハンドルを握るので、ゴーグル、帽子、手袋は必需品です。

大学時代、オートバイのスピード感に魅せられ、その後、車にはまりました。

自動車は日常的な乗り物ですが、驚嘆すべき技術がふんだんに盛り込まれています。この車にもタイヤの回転数を電子制御する技術などが取り入れられ、人馬一体の感覚で操ることができます。素人でも加速、減速、曲がるという運転そのものの楽しさが味わえます。

ハイブリッドのワゴン車も持っています。十分な加速性能がある上、静かで快適です。車内の装備にもこだわり、臨場感のある音響が楽しめるスピーカー、9型のモニターを備えています。炊飯器とホットプレート、電気ポットも積み込んでいます。

忙しくてなかなか旅行の計画を練られないのですが、思い立ったらこの車で出かけます。途中で食材を買い、車内のコンセントを活用してバーベキューをしたり、沸かし立てのコーヒーを楽しんだりしています。昨夏は子どもたちと高知県の四万十川に行きました。望遠鏡も積んでいるので、ふらりと山に登り、星を眺めることもあります。

ハンドルを握ることに集中していると、頭の違う所を使うからか、仕事中に資料を見ていても浮かばなかったアイデアがわき出てくることもあります。いつかアメリカ大陸を車で横断できたらいいですね。

（聞き手・山本照明）

ON タイム　OFF タイム

ご意見、ご感想は〒530・8551読売新聞大阪本社「onタイムoffタイム」係、o-keizai@yomiuri.comへ。